
吸血鬼

マル丸円

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

吸血鬼

【Zマーク】

Z6639D

【作者名】

マル丸円

【あらすじ】

コンビニに現れた金髪女と無氣力店員の変な恋愛もの。

吸血鬼

コンビニでバイトをする俺は、あと10分で深夜のパートさんと交代なので、客もそんなにいなかつたからダリイとか思いながら何気なく店内を放浪していた。

「おい！そこのバカそうな店員！！」客に呼ばれたから・・ではなきなりバカと言われたので振り向くと、そこには日本人離れした長いサラサラストレートの金髪と紅色の眼を持つかなりの美人さんがそこに仁王立ちしていた。

「はつ、はいなんでしょうか？」金髪の美人さんに見惚れて、一瞬返事が遅れてしまう。バカと言われたことなんて忘れている。

「これ、全部買つからカゴに入れて運べ！」仁王立ちの姿勢から右手を伸ばし、人差し指を立てて指さす。それはトマトジュース。

「はつ、はあ・・」金髪女はカゴを持ってなかつたから、カゴを持つてこよつと歩き始めると「走れ！..」と怒号が飛んだ。

（やけに高飛車な女だな・・。でもこれも、店員のさだめだ。言つ通りにしょ・・）渋々とトマトジュースをカゴに入れていく。

「これでいいんですね」とりあえずこの金髪女の指差したトマトジュースは、全部入れた。

「うひのむ！」なんかウンザリしてきた。。

結局金髪女は、店内のトマト関係をすべて俺にカゴに入れさせた。トマトジュースをはじめ、トマトサラダ・トマトのブーリー、さひには調理用のトマトペーストもカゴに入れさせた。重すぎて腕がしびれる。

「よしーこのぐらこだな」カゴ一つ分に山盛りになつたといひで、この金髪女の買い物は終了した。

（やつと終わった終了時間10分も過ぎてゐるし・・・）

「こくらだ？店員」

「ああ、待つてください、今打つんで」残りの力をすべて発揮し、何十キロもあるであろうカゴを、レジに持つて行き、商品のバーコードをレジに打ち込み、袋に詰める。すでに交代で入っていたパートさんも手伝ってくれたが、所要時間約10分。もつすでに俺の仕事時間は、20分オーバーしている。

「1万と3千円になります」値段を言つたといひで、黒く光るカードを差し出された。

「カードで頼む。あいにくと現金は持ち合わせていないんだ」えーとこれは、戦車も買えるとこトマトマンガがドリマでしか見たことないあのカードでしょうか？

「あつ・・・はい」カードを受け取つた手が汗ばまいか不安になつたが、普通に受け取つてつまむように、カード支払いを済ませられた。

「つむ、礼を言おう」満面の笑みでほほ笑むと、巨大な袋に手をかけ、金髪女は早足で店の外へと去つて行つた。というか、あの金髪女、俺があんなに苦労してたのに、軽々と持ちやがつて・・・まああの笑顔は良かつたな・・・。

「それじゃあ俺はこれで」簡単な片付けと着替えをしてタイムカードを押してパートさんに挨拶を済ます。俺の仕事は30分遅れでやつと終了した。

店の扉を開けると冷たい風が、疲れた体に反応して震えた。サブイ。

帰ろつと、自分の原チャリが停めてある駐輪場へと向かうと、ライトの優しい光で照らされた俺の原チャリの隣にさつきの金髪女がちよこんと座つて、さつき買つていつたであろう、ホットのトマトジュースをチビチビ飲んでいた。

思わず、ドキッとしてしまう自分がいた。いや、この画をみたらドキッとしている男なんているはずないと胸を張つて言えるな。うん。

「なにやつてんですか?」平然を装い話しかけるが、内心は心臓バツクバクだ。

「む?なんだかつきの店員か。何の用だ?私に何か用か?」

「こなんに寒いのに外で何やつてんですかお客様?風邪ひりますよ?」仕事は終わつても、一応お客様さんだ。それなりの対応をしなければいけないよな。うん。

「うむ。家に内緒で出てきたものだから、どこにも行くあてがないんだ」ここに辺はかなり物騒だ。近くにはヤクザの事務所があるし。近くにある俺が通う高校は不良の巣窟だし、この前なんか近くに住む〇しが強姦されたとかいう話だ。そんな無法地帯で、こんな美人さんが一人で夜中にひとりでほつつき歩いていたら、危険以外のなものでもない。

「さっきのカード使ってホテルにでも泊まつたらどうだ?」何を思つたのか、金髪女はキヨトンとした顔で俺を見ている。

「……そ、そ、その手があつたか!」でかしたぞお前!」気付かなかつたのか。

「そうですか。それはよかつた。じゃあ解決策も見つかつたみたいなので、俺は家に帰りますね」金髪女の隣をすり抜け、原チャリのハンドルに手をかけようとしたとき、襟をつかまれ、引き戻される。やつたのはもちろん金髪女。

「まで、家に帰る前に、私をホテルまで送つて行け、それが店員だ」どこにもいねえよそんな店員と言いたくなるが、なんかめんどくさいことを延々言われそうなのでやめておく。

なんでそんなことを言つたのかはわからないがただ単に自分の下心が無意識に出てしまつたのだろうか。俺は「わかつたよ」と躊躇なくこの金髪女を原チャリの後ろに乗せてしまつたのだ。

ヘルメットを金髪女に譲り、俺はノーヘル。でもそんなことはあまり関係はないのだ。

さつきも説明したように真夜中のこの町は無法地帯。警察が巡回し

ている姿なんか、昼間に時々見るだけなので、ノーヘルなんかしてもなんとも思わない。

二人乗りで他愛のない話をしながら、走ること5分。駅前のビジネスホテルに到着し、ホテル出入口の前に一時駐車。

「礼を言おう、これはお礼だ。ありがたく受け取れ」そういって差し出したのは、一本のトマトジュース。かなり冷えているはずだが、快く受けとる。

「おお悪いなありがとう」話していると、いつのまにか店員としての態度は無くなり自然にため口で話していた。俺は受け取ったトマトジュースのタブを開け一気に飲み干す。

この缶は不良品だった。飲み口から口を離した瞬間、ギザギザしたものが俺の上唇を引っ搔き、そこから軽く血が出てきた。

「いって！」切れた唇を触っていると、金髪女がいきなりすぐ目の前に来て、俺の顔を物欲しそうな目で見ていた。そう、物欲しそうな目で。

「あっ・・・どうかしたか？」返答はなく、ただおれの顔を見つめるだけ。

しばらくの沈黙の後、金髪女は俺の上唇を触っていたほどの手をどうかし、俺の顔に自分の顔を近づけた。

「血・・・」そんなことを呟きながら俺にした行動・・・それは俺から見れば紛れもないキスで、でも金髪女はそんなことは気にもしていない様子だった。

あれ？ これなんか変だぞ？ なんか上唇が吸われているような感覚だ。

突然のキスから、10秒ほど……あるいはもつとしていたかも知れないが、金髪女は急に我に返ったように、目を見開き、自分の口を離すと同時にいつきに距離をとり、俺の顔を見開いたままの目で見る。頬は若干赤く染まっている。

「えと……どう反応すればいいのかわからないんだけど……」率直な感想。誰でもそ�だら、さつき知り合ったばかりの女の子に、いきなりキスをされてどうすればいいかわかる奴なんてそう居ない。「明日……迎え……ひとり……かえれ……」何かをつぶやくが、小さすぎてよく聞こえない。

「えつ？ なんだ？」

「明日の朝迎えにこい！！ 一人じゃ帰れそうにないんだ！！！」金髪女は心の底から叫ぶ。

「いいぞ。わかつた」返事を聞いて金髪女の顔が一気に明るくなる。

「ところで、トマトといい、さつきの血とか言いながら……その……してきたのつてもしかして……」

「明日ちゃんと迎えに来てくれたなら教えてやる……じゃあまた明日な」 そう言つて金髪女はビジネスホテル内に走つて行つた。

まあいいか、吸血鬼だらうがヴァンパイアだらうがドラキュラだらうが、そんなことはどうでもいい。

といつあえず明日の朝のために寝ておくか。

俺は、明日金髪女をじいじに誘おつか迷いながら、原チャリを転がしてた。

(後書き)

最後のまつり無茶苦茶（汗）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6639d/>

吸血鬼

2010年10月12日06時45分発行